

《椿の実をたどって》
情景を通しての「物語」表現
《Conducting me for the fruits of the camellia》
On expressing my “story”, my imagination originating from what I saw

今利 美咲
Misaki IMARI

崇城大学大学院芸術研究科美術専攻
Division of Fine Art, Graduate School of Art, Sojo University



《椿の実をたどって》 1620×5183 (mm) キャンバス 油彩



《椿の実をたどって》 エスキース 500×1950 (mm) 木炭紙 木炭

修了研究作品《椿の実をたどって》は、故郷である長崎県五島市三井楽町の、山の中の様子をもとにした情景を描いたものであり、「聖母の大椿」と呼ばれる椿を探して歩き回ったときの、自身の想像やそこに生まれた「物語」を表現した。私は、実景の魅力や美しさに出会い、そこに自身の感情やイメージが加わることが、私の絵画表現に繋がると考えている。故郷の椿の山は、私の中で様々な想像が広がった場所であり、印象や思い入れも非常に強い。修了研究作品では、感動を覚えた故郷の実景から私の中に生まれた思いや想像の広がり表現することを目的とし、制作論において「情景を通しての「物語」表現」というテーマのもと、私の中に広がる世界を絵画としてどのように展開していくのかについて考察した。

まず第Ⅰ章では、自身の「想像」について考察し、絵画表現と「想像」がどのように結びついているのかを述べ、制作論のテーマにもある「物語」が、人が情景などを通して想像したこと、個々が抱く時間や空間、感情の広がりであることを定義した。

続く第Ⅱ章では、自身の過去の絵画作品の中で、「物語」を表現したものを振り返りながら表現の特徴を挙げ、その中から見えてきた本作品の方向性と絵画における「物語」表現の課題について考察した。

第Ⅲ章では、本作品の舞台となった長崎県五島の椿の山との出会いの経緯を、そこで見た光景や感じたことなどを踏まえて説明し、次いでその出会いがどのように絵画へと繋がり、どのような「物語」を展開させることとなったのかについて述べた。

第Ⅳ章では、実際に制作の過程で意識した、①画面の構成、②人物を描かない表現、③色彩と筆触という3つの試みを取り上げ、完成した作品において、どのような表現ができたのかを見ていった。また、自身が影響を受けている画家であるモネを取り上げ、本作品を描く中でモネを意識した表現についても述べた。

そして、最後に、修了研究作品の制作や制作論での考察を通して、「物語」を思い切りよく表現できた点や、色彩や筆触の効果を探る中で感じた表現の可能性と課題について述べた。また、「物語」を絵画にしていく上でリアリティの表現とそのため基礎造形力が必要であると感じたことや、本作品が自身の殻を破くきっかけになったことについても触れ、自身にとっての絵画表現と今後の展開についてまとめた。